

Vol.002 チビタベッキオに息づく日欧交流の歴史：和服姿の聖母像が語る物語

素通りされがちな港町が秘める歴史的価値

地中海クルーズの玄関口として多くのクルーズ船が発着するイタリアの港町、チビタベッキオ（Civitavecchia）。MSC クルーズをはじめとする各社の母港として、クルーズ愛好家にとっては馴染み深い地である一方で、その機能が主にクルーズターミナルに限定されるため、観光地としては往々にして「素通り」されてしまう現状があります。しかし、この街は日本にとって極めて重要な歴史的意義を秘めており、その象徴として港のほど近くに佇む教会に、安土桃山時代の和服をまとった聖母子像が静かに安置されています。本稿では、チビタベッキオが有する類稀なる歴史的価値に光を当て、この地が日欧交流史において果たした役割、そして和服姿の聖母像が伝えるメッセージを深く掘り下げ、新たな観光資源としての可能性を提唱します。

1. 東方から欧州へ：二つの遣欧使節団が刻んだ足跡

チビタベッキオは、今から約 450 年前と約 400 年前に、遠く日本から海を越えて欧州を目指した二つの重要な使節団が、長旅の末に上陸を果たした歴史的な港です。まず、1585 年（天正 13 年）、キリシタン大名である大友宗麟、大村純忠、有馬晴信の命を受けた天正遣欧少年使節団が、ここチビタベッキオに到着しました。伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノの 14 歳から 15 歳の少年たちは、マカオ、ゴア、モザンビークを経てポルトガルに上陸後、陸路でこの港町に至り、ローマ教皇グレゴリウス 13 世（後にシクストゥス 5 世）への謁見を目指しました。彼らの目的は、日本におけるカトリック布教の促進と、教皇による布教強化への協力を要請することになりました。遠く東洋の若き使者たちの来訪は、当時の欧州において大きな驚きと歓喜をもって迎えられ、カトリック教会の勢力が地球規模で拡大していることを全世界にアピールする象徴的な出来事となりました。少

ネクストブレイクの今はあまり知られていない、街や地域をご紹介します。観光客があまり訪れることのない魅力的な地を旅することは、旅本来の楽しみ、醍醐味を教えてください。

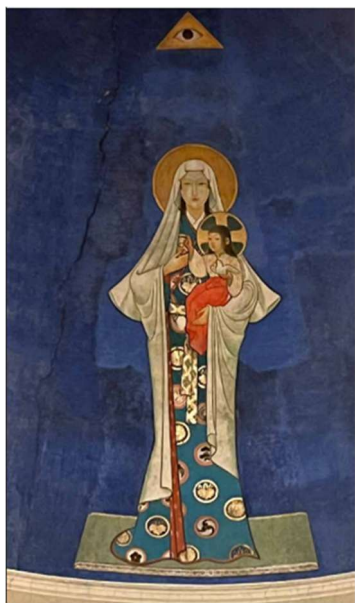
AUTHENTIC TRAVEL
プランナーズ EYE

年たちは各地で熱烈な歓迎を受け、欧州の人々に日本の文化と精神を伝え、日欧間の文化交流の懸け橋となったのです。次に、その約 40 年後の 1615 年（慶長 20 年）、仙台藩主伊達政宗の命を受けた慶長遣欧使節団が、支倉常長を正使として再びチビタベッキオに上陸しました。彼らは太平洋を横断し、メキシコ、キューバを経由して大西洋を渡り、スペイン国王フェリペ 3 世に伊達政宗の親書を届け、さらにローマ教皇パウルス 5 世への謁見を求めました。慶長使節団の目的は、伊達政宗が日本のキリシタン王となることを請願し、さらなる宣教師の派遣を要請することにあります。しかし、彼らがチビタベッキオに到着した頃には、日本の情勢は大きく変化していました。豊臣秀吉によるバテレン追放令、そして徳川家康によるキリスト教禁教令の発布と弾圧が強化され、キリシタンへの迫害が本格化していたのです。この情報が欧州に伝わっていたこともあり、支倉常長一行に対する対応は、天正使節団の時とは一変しました。当初の熱烈な歓迎ムードは冷め、彼らの請願は拒絶され、失意のうちにスペインへと戻ると、国王からの対応も冷淡になり、事実上の国外追放に近い形で日本への帰途につくこととなりました。チビタベッキオの地に降り立った際、これらの使節団の面々は、故郷への想い、使命への重圧、そして未来への希望や不安といった、様々な感情を抱いたことでしょう。彼らが踏みしめたこの港は、まさに日欧交流史における重要な転換点を目撃した場所なのです。

2. 和服姿の聖母子像：歴史が息づく唯一無二の空間

チビタベッキオの港のすぐ近くに位置する壮麗な教

会、サンタ・マリア・アスンタ・デッラ・グローリア大聖堂（Cattedrale di Santa Maria Assunta della Gloria）は、前述の使節団の歴史的意義を静かに伝える場所です。この教会の内壁には、日本の安土桃山時代の和服を身にまとった聖母子像が描かれており、その背景には支倉常長の姿も描かれています。これは、遠い東洋の地から遙々訪れた使節団と、彼らが伝えた日本の文化への敬意と理解を示す、極めて稀有な芸術作品と言えるでしょう。



和服を着た聖母子像

この教会はまた、日本聖殉教者に捧げられた教会でもあります。16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて、日本でキリスト教が弾圧され、多くの信者が殉教の道を辿った悲劇の歴史を記憶する場所なのです。豊臣秀吉による禁教令やその後の迫害という、日本の激動の時代が、このチビタベッキオの地で改めて感じられるというのは、歴史愛好家にとって計り知れない価値があります。

和服姿の聖母子像は、単なる絵画を超え、日欧間の文化交流、宗教の受容と弾圧、そして人々の信仰心が織りなす壮大な物語を静かに語りかけています。これはまさに「唯一無二」の教会であり、その存在は世界中の歴史愛好家や文化に関心のある人々にとって、訪れ

るべき必見の場所であるべきです。しかしながら、多くのクルーズ客がこの歴史的な場所を素通りしている現状は、観光産業の視点から見て非常に残念なことです。チビタベッキオを訪れる人々が、この和服姿の聖母子像と、それにまつわる日欧交流史の深淵に触れる機会を創出することは、新たな観光需要を喚起し、この港町の魅力を再発見する上で極めて重要であると考えられます。



Chiesa dei Santi Martini

3. チビタベッキオの新たな観光戦略：歴史と文化の再評価

チビタベッキオが持つ潜在的な観光価値を最大限に引き出すためには、クルーズターミナルとしての機能性を超えた、新たな観光戦略の構築が不可欠です。

歴史的物語の強調と情報提供の強化：天正遣欧少年使節団と慶長遣欧使節団の辿った道のり、そして彼らがチビタベッキオの地で経験したことに関する詳細な情報提供を行うべきです。港湾ターミナル内や市街地における多言語対応の案内板、デジタルコンテンツの整備、歴史資料の展示などを通じて、訪問者がこれらの物語に触れる機会を増やすことが重要です。

教会へのアクセス改善とプロモーション：和服姿の聖母子像が安置されている教会へのアクセス性を向上させ、クルーズ客が短時間でも容易に訪問できるよう、

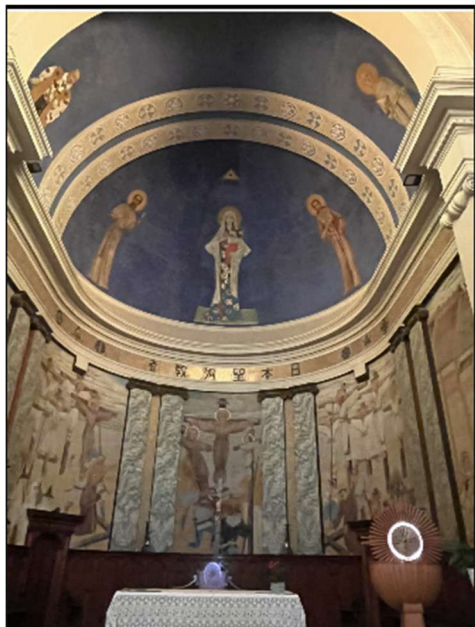
シャトルバスの運行や案内ツアーの設定などを検討すべきです。また、この教会の歴史的・芸術的価値を国内外に向けて積極的にプロモーションし、その唯一無二の魅力を発信していく必要があります。特に、日本の旅行会社や歴史関連団体との連携は、日本人観光客の誘致に大きな効果をもたらすでしょう。

関連文化資源との連携: チビタベッキオだけでなく、両使節団が訪れた他の欧州の地（ローマ、セビリヤなど）や、日本国内の関連史跡（長崎、仙台など）との連携を強化し、「使節団の足跡を辿るツアー」といった広域的な観光ルートの開発も考えられます。これにより、歴史的なテーマ性を持つ持続可能な観光を推進し、より深い旅行体験を提供することが可能になります。

おわりに: 隠れた歴史の宝石を輝かせるために

チビタベッキオは、単なるクルーズの玄関口ではなく、日欧交流史の重要な舞台として、そして和服姿の聖母子像が語る唯一無二の物語を持つ、隠れた歴史の宝石です。この地の持つ深い歴史的、文化的価値を再評価し、観光客がそれに触れる機会を創出することは、チビタベッキオの新たな魅力の発見に繋がり、ひいては地中海クルーズの寄港地としての価値向上にも貢献するでしょう。

クルーズに立ち寄った際には、ぜひこの貴重な教会を訪れ、400 年以上の時を超えて響く、日欧の絆の物語に耳を傾けてみてはいかがでしょうか。チビタベッキオが、単なる「通過点」ではなく、忘れられない「歴史の証人」として多くの人々の記憶に刻まれることを期待します。



安土桃山時代の和服を着た聖母